

## 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

## うしとら

## 第14号

## ● 目次 ●

|  |     |
|--|-----|
| クズネツォフ・無機化学研究所所長 古希の祝典 .....                 | 1   |
| 萬華鏡：「韓国における芸能文化受容の通時的共時的研究」序説 .....          | 2.3 |
| Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「中国」・「モンゴル」 ..... | 4   |
| 日本館便り .....                                  | 5   |
| 研究所紹介：「ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文学研究」 .....         | 5   |
| 最近の出版物より .....                               | 6   |
| 最近の共同研究会・講演会から .....                         | 6   |
| 新任教官紹介 .....                                 | 7   |
| センター動向 .....                                 | 7   |
| 会員の広場：ロシアの技術情報雑感 .....                       | 8   |

## クズネツォフ・無機化学研究所所長 古希の祝典

—プーチン大統領からも祝電—

東北アジア研究センター技官・日本館前駐在員 徳田由佳子

2000年7月12日、ロシア科学アカデミーシベリア支部（以下SB RAS）無機化学研究所所長であるF.A.クズネツォフ（ロシア科学アカデミー正会員）が70歳の誕生日を迎えられ同研究所では朝から盛大な式典が行われました。海外や遠方からの参加者が集まりやすいように、例年モスクワで開催されるシリコンに関する国際会議も今年はこの式典に合わせて9日～12日、ノボシビルスクのアカデムゴロドクで行われました。

クズネツォフ先生は前東北大学総長西澤潤一教授と古くから交流があり、ソ連邦崩壊後で混乱する中でも東北大学・SB RAS間の学術協定締結や当センターシベリア連絡事務所（通称：日本館）の開設にロシア側の窓口として多大なご協力をくださいました。当時ロシアで正式認知された学術機関の連絡事務所開設は前例がなく、行政側の戸惑いもあって登録手続きも遅々として進みませんでした。それにも関わらず1年以上の準備期間を経て日本館を無事開設することができたのは、最後まで粘り強く対応してくださった先生の日露学術交流に対する強い熱意と信念があったからに他なりません。この他、現在クズネツォフ先生はAPAM（Asia Pacific Academy for Materials）の委員長を務めており、世界各国特にアジア諸国との交流も盛んに行っておられるため式典には韓国、ウズベキスタン、ドイツなどからの参加者、中国、インド、フランスなど実に様々な国から祝電が寄せられ先生

の精力的な学術活動が窺われました。ロシア科学アカデミー総裁（モスクワ）や産業科学技術省からはもちろんですが、特に会場を驚かせた



のはロシア大統領V.V.プーチンからの祝電でした。

「拝啓 フョードル・アンドレーヴィチ（クズネツォフ）殿 70歳のお誕生日を心からお祝いいいたします。貴殿は世界中で評価されている学術的な修業の場を創立し、多くの学者を数代にわたり教育してきました。貴殿の材料学部門における研究は電子材料、光学材料産業の発展に大きく貢献しています。これらすべては貴殿の才能、経験、統率能力に負うものであります。貴殿のご健康、創作的業績、安泰をお祈りいたします。V.プーチン」

その人柄と学術に掛ける情熱で多くを築き上げてきたクズネツォフ先生。今後も指導者として、研究者として、オルガナイザーとして益々ご活躍されることを祈念したいと思います。



## 「韓国における芸能文化受容の通時的共時的的研究」序説

東北アジア研究センター 教授

成澤 勝

★

韓国の大学に「研究教授」という制度があり、これに任じられると、教育の責任を免除され研究に専従することができる。平成13年度後半は日韓文化交流基金の支援も得て、高麗大学より客員の研究教授の職を頂いた。研究テーマは「韓国における芸能文化受容の通時的共時的的研究」。言語にしる、宗教にしる、文化は社会等人間集団を形成し、その集団の枠組みともなるが、芸能という文化（あるいはそれに付随する諸々の文化）はそうした働きをしないという仮説を追うことが最大の目的である。そして、果たしてそうであるとすれば、文化故に排他的とならざるを得ない人間集団相互間を、「融和」「共生」へと導く力もあるのではなかろうか。

特にこの国を作り上げている民族においては一定の文化がその枠組みを構成してきたことは顕著であるが、しかしそうした歴史を歩み始めたのはそれほど古いことではない。おそらく7世紀末以後であろう。それ以前の、例えばこの祖系のひとつである高句麗という「国家」を見ても、700年ものあいだ確かに支配（統治）機構はあったが、境域は常に大きく変動し、また民族的には実に多様であった。北方ツングース系の他に、漢系、鮮卑、匈奴さらにはペルシャ系まで確認できる。そうした多様な人間集団にはそれぞれに、他集団の人にはなかなか入り込みにくい独自の文化があったのは当然であるが、しかし、そこを構成する社会群を超えた汎国家的文化が確認できる。外部（たとえば日本や中国南朝・隋・唐など）ではそれを以て「高句麗のもの」と見なした。すなわち楽舞（音楽文化・舞踊文化）である。人間や人間集団の枠を超え、個々の心に浸み込み、人々の間に相類する一定のパトスを形成する。後代には礼楽思想にも加速されて、楽舞は国家統一の方途としてさらに機能は認められていくが、この礼楽思想との結合はまた別の話としなければならない。

★

この、パトスの共有は現代的には楽舞にとどまらない。言語性が濃厚であったり特定のドグマに偏ったりしない限り芸能一般に言えよう。映画やアニメーション・漫画などが新たに大きな位置を占めてくる。すなわち、前述のような仮説を以て現代を見れば、芸能交流には民族間の融和・共生のために一定の有効性を求めうるのではなかろうか。特に現代的課題として残されているのが対日



高句麗「長川1号墳」壁画：様々な民族の顔貌や衣装等が見られる中、芸能者の姿も—AD400年頃

芸能交流である。

日本では古くから韓国歌謡を受け入れ、文化交流目的よりも、商業ベースで社会に定着している。映画等も昨今一般の劇場上映が増えてきている。一方、韓国では日本伝統芸能や芸術作品的文化は「紹介」という形で受け入れたが、民間芸能の方面では「政策の壁」が大きく立ちばばかり、なかなか大衆化し得なかった。1994年、日本大衆文化段階的解禁の方向が取られながらも開始時期は先送りされ、キムデジュン（金大中）政権が成立して1998年によりやく映画・ビデオが解禁され、漫画雑誌等が開放された。しかしこれも条件付きで、いわゆる「第1次開放」である。翌99年にはこうした条件が一部緩和され、劇場用アニメーションを除き映画が大幅に開放され、また歌謡の小規模公演場における公演が認められた。「第2次開放」である。さらに2000年6月には、18歳未満制限以外のすべての映画・劇場公開済みビデオ・国際映画祭受賞アニメが解禁され、歌謡公演も全面解禁、レコードも日本語以外すべて開放された。放送も映画放映に条件があるもののほとんど開放された。第3次開放であって、あと残されたのは日本語歌詞の媒体（レコード・CD・テープ等）販売と放送、テレビドラマ・娯楽テレビ番組、国際映画祭非受賞作アニメの上映等である。教科書問題や首相の靖国神社参拝というこの残された部分が最後の課題として棚上げにされており、全面開放問題が昨年来韓国国内で議論されてきている。韓国の日本文化開放及びそれに伴う韓国側の受容相等については2000年までに数次にわたり、諸方面から調査された例がある。最新の報告では『日本大衆文化と日韓関係』（朴順愛・土屋礼子

2002.5) が多面的なアプローチを試みているが、データが2000年までのものである。したがって、スポット的であっても、以下に一部を紹介する私の調査分析は最新のものといえよう。

★

こうした行政によるガードの状況下において、開放されつつある日本の現在の文化現象に受け手の韓国一般民衆はどのような感覚・認識を持っているのであろうか。本格的な調査が望まれるところではあるが、いまだこうしたデータは集められていない。しかし、この度の在韓研究のひとつの目標はこうしたデータの収集でもあった。折悪しく、教科書問題等による韓国側の反感が極に達していた時期でもあったため、諸方面の組織や団体からの協力はほとんど得られなかった。例えばタクシー乗車時などのように、もっぱら個人個人のレベルでの接触の機会に意見を求めたり、あるいは放送や新聞等メディアの中から拾い集めるくらいであった。そうした中、在韓研究の協力教授であった高麗大学の徐淵昊博士の親身の力添えにより、ソウル市立紫陽高等学校の全面的協力を得ることができた。

オムジモン（巖辰雄）校長の「どのような協力でも」ということばに甘え、事前に準備していったアンケート調査用紙の配布、生徒たちとの面接調査をお許し頂いた。アンケート調査では3年生の全クラスおよびその担任教諭の皆さんが対応してくれた。これすら実に限定された時間内での作業であり、あくまでも簡易調査の域を出るものではない。あるいは、爾後に期待される組織的総合的調査の予備作業ともいえよう。それでも、相当の結果を得ることができた。

★

このページでは、この調査のすべてについて論じるではない。この調査のテーマとした中から一部分を集計・分析してみる。すなわち、まず開放された結果享受し得た日本文化の個々（文化関与者や作品等）に対して、韓国民（特に10代後半の若年層）がどのような姿勢にあるか、あるいはどのような印象を持ったか。そして第二に、関心や認識の深さは如何ようであるか、といった2点である。

調査日：2001年11月29日

調査場所：韓国ソウル市、市立紫陽高等学校

調査対象：第3学年

調査方法：アンケートおよび面接調査

アンケート用紙配布：410枚

アンケート用紙回収：273枚

選択肢：(a)内容までよく知っている（映画の場合見たことがある） (b)詳しくはないが知っている (c)聞いたことがある／名前程度は目にしたことがある (d)知らない

(A) この時点でソウル市内（文化の最先進地域であると同時に外国文化への反応も最も速い）の平均的高校生における、文化開放とはほとんど関連しない一般の日本若年層文化に対する認知（認識）度を見ると、よく知っていると回答のあった現象は「やまんば：1.5%」「たけのこ族：1.8%」



ソウル市立紫陽高等学校

「SMAP：4%」「モーニング娘：4%」「SPEED：10%」「アムロ（安室奈美恵）：13.2%」といった程度である。これに対して、開放された分野を見ると、まず映画では「HANA-BI：27.8%（内この映画を見たもの4.8%）」「カンゾー先生：31%（5.1%）」「鉄道員：49.8%（13.6%）」「Love Letter：67%（30.8%）」と明らかに高率になる。さらにアニメーションでも特に宮崎駿の2作品の場合「風の谷のナウシカ：40.7%（16.1%）」「もののけ姫：60%（27.1%）」（「千と千尋の神隠し」は当時未公開）と開放されたものは一挙に韓国社会に浸み込んでいく。漫画ともなると「ドラえもん」は64.5%で、中でも読んだことのある人は31.5%にのぼる。韓国の芸能産業にとっては明らかに驚異であり、さらにそれに支えられる文化分野も成長が阻害されるであろうことは容易に想像がつく。なかなか完全解放に踏み切れない韓国政府の意中もよくわかる。ただ、逆に日本文化を入れないと、競争・触発といった観点から自国の芸能文化自体が成長できないのではと危惧される面も一方ではある。面接調査では、「風の谷のナウシカ」は家族一緒に見た。父は「韓国には家族で見ることが出来るアニメは無いなあ」と呟いた」と答えた生徒もいた。アニメを漫画の延長と捉え、子供のおもちゃとしか認識し得なかった韓国の「おとな」支配文化は、新しい方面での文化の創造の足枷となっている面も窺えるのである。

(B) 簡単に、認識の深度についても一点のみ触れてみる。すでに述べたように「風の谷のナウシカ」「もののけ姫」はよく知られている。しかし、作者宮崎駿の認知度は22%で、こうしたアニメの作者として知っているのは8.4%に過ぎない。宮崎駿についてよく知っているが、この両作品のいずれも見なかった人は23人中3人で、ほとんどが作品を通して知ったと言えよう。また、この両作品を見た（40人）けれども作者についてよく知らない人は23人おり、作品認知が必ずしも深みを有しているとは言えない。

★

以上の簡略な観察からも、問題の典型が浮き彫りにされてくるし、また、一隅とはいえ、韓国における文化交流相のディテールが見えてくる。今後さらに本格的分析の進展が求められる。

AREA REPORT



## ロシアから モスクワに東北大学連絡事務所が開設

6月20日(木)にモスクワ大学で、阿部総長(東北大学)とサドーフニチ学長(モスクワ大学)が東北大学連絡事務所設立に関する覚書に調印し、同日、低温物理学科で東北大学連絡事務所の開所式が行われた。開所式には、東北大学から谷所長(流体研)、中塚工学研究科長、佐藤教授(留学生センター)、佐藤教授(東北アジア研究センター)始め14名が出席し、モスクワ大学からシドローヴィッチ教授(経済学部)、トゥルーヒン物理学部長、ストリジャック助教授(アジア・アフリカ学部)等6名が出席した。

東北大学の海外拠点としては、すでにシベリア連絡事務所(ノヴォシビルスク)が1998年に設立されているが、モスクワの連絡事務所は二つ目の海外拠点となり、東北大学はロシアに二つの拠点を築いたことになる。モスクワの拠点がノヴォシビルスクと異なるのは、東北大学がモスクワ大学に連絡事務所を構えるだけでなく、モスクワ大学も東北大学に連絡事務所を設置するという、双方向性を兼ね備えている点である。このようなケースは世界的にも稀であり、斬新な方向性を見出したと言える。モスクワ連絡事務所とシベリア連絡事務所との連携が強化されれば、効果的な国際プロジェクトを企画し易くなるだろう。今後、東北大学はロシアだけでなく、イギリス、オースト

ラリア、アメリカ、スウェーデンにも海外拠点を設置する予定であり、現在その準備が進められている。

(塩谷昌史)



阿部総長とサドーフニチ学長(中央二人)

## 中国から 中国スポーツ事情

昨秋、広東省での文化人類学調査のために広州市に滞在した際、宿泊した市内のホテルは、ロビーの客たちもみな頑強そうな青年男女ばかりで、近頃の中国人ときたら急に体格がよくなったのか、と目を見張った。

それもそのはず、ちょうどそのころ、「第9回全国運動会」、すなわち日本の国体にあたる国内スポーツの祭典が広州市を中心に開催されており、そのホテルの泊まり客たちも、出場選手が大半であった。夜中には、突然「貴州隊啊?」(貴州代表団ですか?)と間違い電話が飛び込んでくる。「不是。我是日本隊!」(違う。日本代表団だ!)と冗談で言っていると、向こうは一瞬唖然としていた。

次の次のオリンピックが北京に決まって以来、中国ではスポーツ振興に一層の拍車がかかり、こうした「運動会」もその準備の一環と位置づけられて、大変な熱の入れようである。街中に歓迎の横断幕がかけられ、テレビも連日競技の様態を中継しっぱなしだ。

しかし、こうしたスポーツ大会にも、中国国内の地域格差が見え隠れしている。大会に大選手団を送り込んで目覚ましい活躍をしているのは、上海、北京、遼寧、山東、江蘇、四川、それに地元の広東などの沿海先進地帯を主とする地域で、内陸の諸省の中には主要競技にエントリーさえできないところも少なくない。今回の広州のように、「運動会」の開催地となることのできるのも、開催のための経費やインフラを準備できる豊かな地域だけだという。WTOにも加盟し、先進都市地域は活況にあふれる中国だが、その国土は広く、地域間格差の問題は依然深刻である。

(瀬川昌久)

## モンゴルから 国連職員遭難事故の判決

昨年1月14日、モンゴル国オブス県で雪害調査中の国連チームを乗せたロシア製ヘリコプターMI-8が事故を起こし、同行したモンゴルの国会議員1名、日本の取材記者2名を含む乗客9名が犠牲となった事件で、本年5月3日、ウラーンバートルの裁判所は機長に6年、副操縦士に5年の禁固刑を言い渡した。この事故は、クルーがあらかじめ設置された着陸地点を無視して100メートル離れた窪地に無理な着陸を試み、バランスを崩して横転、火災により大破したというものである。しかし被害者側と機長双方の弁護士は、この判決が機長と操縦士にのみ罪をなすり付けているとして控訴を表明している。「モンゴリン・メデー」紙の報道によれば、同乗の郡長が休暇中の子供を便乗させたり、通訳が禁止されたガスボンベをひそかに持ち込んだり、制限重量を超えるガソリンを客室に搭載したり、消化器具が準備されていなかったりといった、常識では考えられな

いことが行われている。また、郡では前日13日に一行が到着すると聞いて着陸地点を整地して目印の旗を立てたものの、到着しないので旗を撤去して解散してしまったという。また裁判での証言を見ると、「薄着の外国人を長い距離歩かせないよう、できるだけ(目的地の牧民家庭の)近くに降ろそう」としたのだとか、草原で火が絶えた時のためにガスボンベを持ち込んだが、搭乗の際には何の検査も受けなかったとか、はたまた着陸地点を指示する郡長に機長が訪問先の牧民の家を教えろと求め、郡長もプロの言うことだからと敢えて逆らわなかったなど、そもそも運航に緊張感が感じられない。被害者側の弁護士は、ヘリを運航する会社が、国会議員のフライトに平常の運航プランを採用したのは軽率だと批判しているが、要人対象の特別運航態勢をとらなければ事故が防げないとすれば、恐るべきことである。

(岡 洋樹)

# 日本館便り

nihonkan・dayori

5月にもなるとシベリアとは言え夏の到来を思わせるような暑い日も増えます。早々と半袖に着替える人もいれば、まだ革ジャンを羽織っている人もいたり。これほど町行く人々の服装がバラエティーに富んでいる時期はないでしょう。キオスクで買ったビールやアイスクリームを食べながら散歩するカップル、流行のローラーブレイドで遊ぶ子供たち。ゆったりと流れる時間をそれぞれが思い思いに楽しんでいる幸せな光景です。

ところでロシア語辞典でダーチャは“避暑用の別荘”と訳されることが多いようです。実際にダーチャを見て、それが日本で一般的に想像されるような“別荘”とはちょっと違うと思った方もいることでしょう。ここでは多くの人が住宅地から少し離れたところに家庭菜園用の土地を持っていきますが、その敷地内にある家がダーチャです。平坦なこの地で、家からバスで30分・徒歩20分でいきなり涼しい場所に辿り着けるわけもなく、時間の有効利用のためにダーチャに寝泊まりして農作業することはあっても“避暑”のために利用することはあまりありません。

先日、知り合いのダーチャに招待されました。バス停から森を抜けたところであり、30分以上は歩いたと思います。途中ダーチャ方面から走ってくる小学生2人とすれ違いましたが、それを見た知人



招待されたダーチャです。ネギ、サラダ菜、キュウリ、ニンジンなど一般的な野菜のほとんどが栽培されていました。

はすかさず「トレーニングしているのか、何かを盗んで来たかどっちかだな」とコメント。もちろん冗談ですがこんなジョークが出るようになったのは最近です。ここ数年、薬物中毒の子供たちによる金目の物を狙った冬季のダーチャ荒らしが問題になっており、あまり立派にすると狙われやすいので外見は質素にするよう人々は努めているのだそうです。歩いていると、質素どころか荒廃しているダーチャもいくつかありました。所有者が年老いて働く力がなくなったのか移住したのか。1度荒らされてその後は整備する資金もなく放置されているのかも知れません。しかし、到着したところは野菜やきれいな花だけでなく人工池やサウナまであるとても手入れされたダーチャでした。お昼は取れた野菜を使ったサラダとパーベキュー。立地条件は異なっても気持ち的にはやっぱり“別荘”と訳して正解かとも思いながらその日は楽しい時を過ごしました。

ある日曜日の夕方、アパートの外に目をやるとバスがちょうど人を降ろしているのが見えました。皆リュックを背負ってバケツを持ち、一目でダーチャ帰りと分かります。しかし、若者が1人もいません。不思議に思いながら道路の反対側を見るとこちらは若者一色。ビール片手に優雅な散歩です。かつて「苺やベリーの際はダーチャに食べに行くけどあとは行かない。」と友達と言っていたのを思い出しました。畑仕事をしない者にとっては“別荘”。辞書編纂に携わった日本人も然り。編纂に携わったロシア人はダーチャ不所持者か土いじりが好きな人達だったのかも、などと思いつつ人々を眺めてしまいました。(徳田由佳子)

## 研究所紹介

### ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文科学研究

ロシア科学アカデミーにおける研究組織は、科学アカデミー本体が管轄している研究所群と地域ごとに設けられた各支部が管轄している研究所群とに分かれている。地域ごとの支部とはウラル支部、シベリア支部、(ロシア)極東支部の三つである。今回はノボシビルスクに本拠地をおくシベリア支部の管轄にある人文科学研究分野を紹介したい。

シベリア支部の研究組織は、科学アカデミー本体と同様に入れ子式になっている。シベリア支部は自らが直轄する研究所群をもち、さらに各地域に「研究センター」をおき、その研究センターが各地域の研究を束ねているからである。研究センターは、ノボシビルスク、ブリヤート地区、イルクーツク地区、ケメロフ地区、クラスノヤルスク地区、オムスク地区、トムスク地区、チュメニ地区、ヤクーチア地区の9つに設置されている。シベリア支部の組織図では、理工学系の各部門に加えて、「経済学部門」と「人文学部門」という組織がある。ノボシビルスクに設置されているシベリア支部直轄の主たる人文社会科学系研究所は、経済・産業生産組織研究所(IEOPP)、歴史研究所(II)、考古学・民族学研究所(IAET)、文学研究所(IFL)、哲学・法学研究所(IFPR)、歴史・文学・哲学合同研究所(OIIF)である。

ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文科学研究は、シベリア・ロシア極東考古学ですぐれて著名な故A.P.オクラドニコフ博士の研究業績と深く結びついている。彼はチュルク・モンゴル系諸民族と北方諸民族そしてロシア人などとの多民族間の歴史的交流をテーマとし、極北環境と人類の相互関係の研究の必要性を説いた。このことは人文学と自然科学の協力を導いたのである。

こうした研究方針のもとで、考古学・民族学・文学・言語学などが協力し文化遺産・文化伝承研究に取り組んでいる。伝統あるロシアのウラル・アルタイ言語学研究成果はシベリア支部においても継承・発展されている。とりわけ言語学・民俗学分野においてはシベリア先住諸民族の辞書編纂やレコード/CDのついたフォークロ

アシリーズ(全60巻の予定)が成果となって現れている。

シベリアは古文学上も興味深い資料がおおい。旧教徒の残した古文書や文化遺産さらに様々な伝承が見られるからである。ノボシビルスクにある国立学術・科学技術図書館(GPNTB)内のシベリア古文学センター(SATs)には2000冊以上の旧教徒に関する資料が保管されている。またブリヤート研究の進展とともに、ロシアおよびブリヤート人の国宝と言わなければならないモンゴル関係の書籍・古文書・木版の収集・研究がされている。チベット及び仏教研究におけるシベリア学派の特徴は、シベリアにおける仏教の伝播過程と先住民文化との交流の解明に取り組む点にあるといえるだろう。

歴史研究が焦点をあてるのは、ロシア史および世界史におけるシベリアの役割と、ロシアとアジア太平洋地域双方にまたがるシベリアの地政学的な位置づけである。加えてこれまで利用が制限されてきた歴史資料をもちいた実証研究も重要である。さらに17世紀から19世紀の古文学の研究成果によって、権力と社会、自治、ロシア正教会史、旧教徒研究などの新しいテーマの開拓が精力的に進められている。考古学分野ではアルタイ山脈地域の旧石器文化の発掘が進められ、自然科学的手法をもちいた文理融合の研究が成果を挙げている。第四紀における30万年間以上に及ぶヒトと環境の関係に対する進化過程のモデル構築に成功したという。

なお、ノボシビルスクにある考古学・民族学研究所の入り口には、故オクラドニコフ博士のレリーフが貼られている。そこには、「傑出したソビエト歴史科学者であり、＜社会主義労働英雄＞であるアカデミー正会員オクラドニコフが1961～1981年までここで研究した」と刻み込まれている。以前この研究所を訪ねた際、私はその民族学部門でブリヤート人、アルタイ人やハカスを調査している若い研究者と出会うことができた。彼らはそれぞれの民族・地域の歴史や文化伝承について研究を進めている。またこの研究所の図書館には『Current Anthropology』、『Central Asian Studies』等をはじめとする人類学考古学に関する英文の学術雑誌が多数そろえてあり、複数の中国語の雑誌、日本語では『考古学雑誌』が唯一所蔵されていた。複写は一枚1ルーブル(約4円)で可能であり、大変使いやすかった。なお、ロシア科学アカデミーシベリア支部との国際共同研究については下記のURLを参照されたい。

<http://www.sbras.nsc.ru/sicc/cooper00.htm>

(高倉浩樹)

## 最近の出版物より

### 栗林均・確精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引

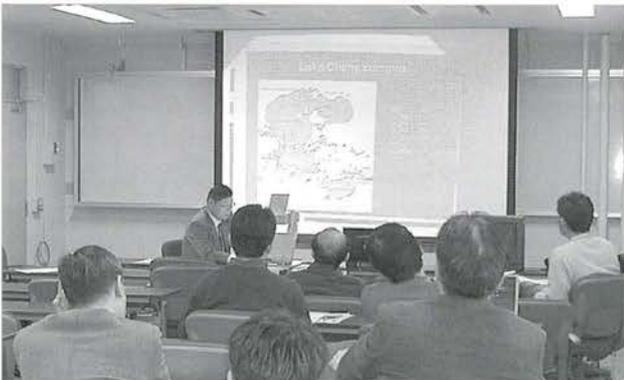
(東北アジア研究センター叢書 第4号)、vi+954頁、2001年12月刊行  
 『元朝秘史』は、チンギス・カーンの一代記を中心としたモンゴルの史書です。内容はチンギス・カーンの祖先から説き起こして、モンゴル帝国の第2代ハーン(皇帝)であるオゴタイの時代にまで及びますが、チンギス・カーンの生い立ちから死に至るまでの事績が韻文を交えて生き生きと語られているのが特徴です。13世紀に著されたこの書物のモンゴル語の原本は現在に至るまで発見されていません。現存するのは14世紀にモンゴル語の発音をすべて漢字の音によって記したもので、そのやり方は漢字の音で日本語を表記した「万葉仮名」にたとえることもできます。この文献は、13～14世紀のモンゴル語を研究する上で極めて重要な資料として世界の研究者の注目を集めてきました。内蒙古大学の確精扎布教授と共編で出版した表題の書物は、ローマ字転写を原文と対照させ、そこで用いられているモンゴル語のすべての単語と名詞や動詞の語尾の索引を作成したもので、斯界の研究の一助となることを願っています。(栗林 均)

『東北アジア研究』6号、2002年3月刊行

●広東省海豊県の漢族の地方文化と宗族／瀬川昌久 ●エヴェン民

族自治郡の成立とサハ共和国——シベリア・北部ヤクーチア住民の社会主義経験(英文)／高倉浩樹 ●民族区域自治法改正に見る中国民族法制の現状／上野稔弘 ●海賊船ユノナ号とアヴォシ号——ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件／キリチェンコ アレクセイ ●1930年代初頭のソ連の対新疆政策／寺山恭輔 ●カルムイクにおけるロシア語の話し言葉と正しい言葉づかいの諸問題／エセノヴァ タマーラ ●NOAA AVHRRデータを用いた北西アジア海域のエアロゾル特性のリモートセンシング：推定システムの開発(英文)／岩淵弘信・傍島明・工藤純一・浅野正二 ●東北アジア地域の分散型リモートセンシングシステムとシベリアの環境評価(英文)／イエローヒン ゲナディ・工藤純一・徳田昌則 ●中国における活火山(英文)／劉嘉麒・谷口宏充 ●中国の神話と伝説にみる天池火山の噴火(英文)／魏海泉・谷口宏充・劉若新 ●ロシア、トゥバ東北部、アザス台地の新生代アルカリ玄武岩の岩石学的特徴(英文)／リタソフ ユーリ・長谷中利昭・リタソフ コンスタンチン・ヤルモリューク ウラジミール・スゴラコバ アミナ・レベデフ ウラジミール・佐々木実・谷口宏充 ●バイカル・リフト軸に沿う上部マントルのリソスフィア構造と熱的状态：深部捕獲岩にもとづくエビデンス(英文)／リタソフ コンスタンチン・伊藤嘉紀・リタソフ ユーリ・北風嵐・谷口宏充 ●鬼界カルデラにおけるアカホヤ噴火以降の火山活動史／前野深・宮本毅・谷口宏充 ●資料紹介『ロシア領アメリカの歴史：1732-1867年』／伊賀上菜穂・塩谷昌史・寺山恭輔

## 最近の共同研究会・講演会から



共同研究発表会風景

◆2002年4月15日(月)13:00より、2001年度共同研究発表会が開かれた。センター共同研究は平成13年度で終了した3テーマと現在進行中の9テーマがあり、それぞれ最終成果報告と中間報告が行われた。

最終成果報告：

- ・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証 (代表：成澤 勝)
- ・文化のディスプレイと伝統の再編—東北アジア地域における民族観光産業・博物館等の文化的影響力についての研究 (代表：瀬川昌久)
- ・東北アジアにおける民族移動と文化の変遷 (代表：栗林 均)

中間報告：

- ・前近代における日露交流資料の研究 (代表：平川 新)
- ・ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究(代表：山田勝芳 報告：河野公一)
- ・中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果 (代表：谷口宏充)
- ・東アジア出版文化の研究 (代表：磯部 彰)

- ・ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究—民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察 (代表：高倉浩樹)
- ・北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究 (代表：岡 洋樹)
- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究 (代表：菊地永祐)
- ・東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究(代表：柳田賢二)
- ・東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備 (代表：宮本和明)

◆2002年5月20日(月)13:00より、講演会「カムチャツカの概要(地理、経済、生態と政治の状況) Outline on Kamchatka (geography, economy, ecology and politic situation)」が開かれ、東北アジア研究センター客員教授オクルギン教授(ロシア科学アカデミー極東支部火山研究所 鉱物学・鉱床学研究部門・研究部長)がカムチャツカの現状について講演した。

◆2002年5月30日(木)14:30より、講演会「ブリヤートの宗教施設：歴史文化遺産の保存」が開かれた。スレンハンダ・ダシニマエヴァ・スィルティボヴァ氏(ロシア科学アカデミー、ブリヤート・モンゴル仏教チベット研究所稀観文献研究部研究員)が、ブリヤートの仏教寺院の現状とその保存に関する報告を行った。

◆2002年5月31日(金)15:00より、共同研究「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」の補充編第2回が開かれ、次の報告が行われた。

- ・鄭 永振(東北アジア研究センター客員教授・延辺大学渤海史研究所長)

「渤海遺地出土銅製帯留めの金属科学的分析に向けて」

◆2002年6月17日(月)17:00より、共同研究「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」の第4回研究会が開かれ、次の報告が行われた。

- ・藤原潤子(東北大学東北アジア研究センター機関研究員)
- 「ロシアの結婚儀礼の空間」

(鹿野秀一)

## 新任教官紹介

### 「新鮮な毎日」

環境社会経済研究分野助手 佐藤有希也

平成14年4月1日より東北大学大学院工学研究科を中途退学し、本センターに助手として赴任しました佐藤有希也と申します。大学院を中退し、教員として働くこと自体が突然のことで驚きでしたが、本センターに赴任してからの毎日の研究生活でも驚きにあふれています。工学研究科では土木工学専攻に属し、周囲も同様の研究を行っていたの



研究室にて

に対し、本センターでは東北アジア地域に対して、様々な側面から多様な研究が行われており、新鮮な驚きを感じています。私の専門は地域計画や都市計画でありますが、現在の興味は、新しい公共事業の評価手法の確立にあります。現在の公共事業批判のなかで、公共事業に関する会計システムを見直すことにより、「本当に必要な公共事業は何なのかということ」を、住民に分かり易い形で示すことができるシステム作りを目指しております。

また、研究室全体としてのテーマであるGIS（地理情報システム）に関する研究は、東北アジア地域に関する様々な研究に対して、データベース化や研究成果の視覚的なアウトプットに非常に有用なツールであり、共同研究等で何らかの形で本センターに貢献できればと考えています。今後ともよろしく申し上げます。

### 「自己紹介」

研究機関研究員 藤原 潤子

はじめまして！ この春から1年の任期でセンターの研究員に着任しました藤原と申します。どうぞよろしくお願い致します。大阪外国語大学に在学中、もう7年ほど前になりますがアカデムガラドクのノボシビルスク大学に留学していました。今回そことつながりを持つ本センターで働くことになったことに不思議なめぐり合わせを感じます。秋に出張で久しぶりにガラドク行くことになり、とても楽しみにしています。

センターでは主に、江戸時代にロシアに流れ着いた日本人漂流民に関する研究に携わる予定です。と同時に私の専門であるロシア民俗研究も進めていきたいと思いません。これまで民間に伝わる昔話、民謡、呪術などをロシアの歴史的記憶の集約点としてとらえ、そこに表れている民衆の世界観について興味を持ってきました。現在、今なお多くの呪術師・魔術師が住んでいるというカレリア地方へのフィールドワークを計画中です。現代の村社会の中で彼らがどのような役割を果たしているのか、よく見てきたいと思いません。



カラドクの小さなカップル

### 「自己紹介」

研究機関研究員 フラメット ウィチェンサン

フラメット ウィチェンサンと申します。タイの首都であるバンコク出身です。1996年にタマサート大学シリントーン国際工学研究所を卒業しました。専門は土木工学でした。そして、1998年にアジア工科大学院修士課程を修了しました。



フラメット ウィチェンサン 研究員

その後、日本文部省の研究生奨学金で日本に留学しました。1年間の研究生を経た後、東北大学大学院博士課程に入学しました。そして、2002年4月より東北アジア研究センターに講師（研究機関研究員）として勤めています。

研究分野については、地理情報システム（GIS）について興味を持っています。主として、GISに基づいて土地利用・交通モデルについて研究しています。これらのようなモデルは、都市モデル開発、都市計画、交通計画に用いられています。また、GISによる環境問題解決などの他のGISの利用についても関心があります。どうぞよろしくお願い致します。

## センター動向

### ■ 寄附研究部門

昨年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

#### 【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（昨年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（昨年4月着任）

### ■ 現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

#### <客員教授>

##### 【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

#### 【海外から】

- 鄭 永振（テイ、エイジン）教授：中国、延辺大学教授、渤海史研究所長、ツングース系諸族の興亡とその文明～渤海を中心に～
  - KONG, Fan-Nian（コング、ファンニアン）教授：ノルウェー、ノルウェー地球工学研究所研究員、ボアホールレーダの開発に関する研究
  - KIRITCHENKO, Aleksei Alekseevich（キリチェンコ、アレクセイ・アレクセーヴィチ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・東洋学研究所南太平洋研究部門上級研究員、日露・日ソ関係に関する歴史的研究
- <客員研究員>
- 呼日勒巴特爾（フルバートル）研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
  - 曾 昭發（ツェン、ツォファ）研究員：中国、吉林大学助教授、地下計測の研究
  - 方 広有（ファン、グアンヨウ）研究員：中国、中国伝播伝搬研究所教授、高精度地中レーダの開発と人道的地雷検知への応用に関する研究
  - 鄭 炳説（チョン、ピョンソル）研究員：韓国、明知大学校国語国文学科助教授、近世日本人の韓国語学習に使用された韓国古典小説
  - 朴 慶洙（パク、ケンジュ）研究員：韓国、江陵大学校人文大学日本学科助教授、仙台藩商人資本の研究（柳田賢二）

東北アジア学術交流懇話会

会員の広場

お互いの交流拡大を目的として、会員皆様の近況、ご意見などを発信していただくスペース（不定期）です。今回は、学生時代に第二外国語としてロシア語を選択して以来、製鉄会社に入社後も一貫してロシア技術に関心を向けてこられた 加藤嘉英会員殿の登場です。



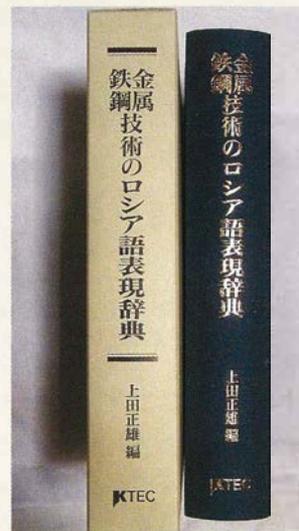
ロシアの技術情報雑感

川鉄テクノロジーサーチ㈱ 知的財産・技術情報事業部 加藤嘉英



川鉄テクノロジーサーチ㈱ (KTEC) は、技術を中心とする情報・特許類の調査、物質の分析・評価、技術のコンサルテーション、セミナー開催などを生業とする鉄鋼系のシンクタンクです。私は知的財産・技術情報事業部 調査・情報グループに所属して、国内・海外の鉄鋼情報等の収集・調査・加工を行っています。

るのか？ その答えの一つは、良い意味で細分化された領域を、役に立つかどうかをさほど意識せずに延々と研究し続けた結果にあるような気がします。日本の技術者は、先行技術を導入しそれを個別にあてはめることに創意工夫するという状況からトップランナーとして「技術立国」を目指す立場に変わり、グランドデザインを描くのに苦心しています。しかも、国や企業に資源的余裕がなくなりつつあります。このような時、一步踏ん張ってロシア的(?)な発想も持つてみる必要があるのではないのでしょうか。



例えば、KTEC 発足後の 1985 年 1 月から発刊をはじめた「海外鉄鋼情報」は 2002 年 7 月に 408 号を発刊したところで、ロシア、中国、韓国を含む最新の鉄鋼情報を社内外に広く提供しています。変わったところでは、1993 年に「金属鉄鋼技術のロシア語表現辞典」(写真)を発行しました。元川崎製鉄㈱社員の故上田正雄氏が折にふれてカードに記入していたロシア語文献での表現をまとめたもので、当時好評を博したと聞いています。このような KTEC 調査・情報グループも最近では、多彩な経歴を有する研究員の能力を生かし、鉄鋼以外の分野の技術調査や技術評価などにも手を広げつつあります。

さて、ロシア技術の特徴と言えば「ユニークな発想」と「頑丈な設備」にあるという人が、私のまわりの鉄鋼技術者に少なからずいます。私が以前たずさわっていた鉄鋼製錬部門では、高炉炉頂圧発電、コークス乾式消化(CDQ)などの製鉄技術が有名で、いずれも日本において広く実用化されています。製鋼分野では、水平連続铸造プロセスや音波印加による精錬効率向上技術などに発想の斬新さが見られます。

私達には到底思いもつかないようなアイデアがなぜ出

今後、ロシアは政治が安定する中で経済の成長が見込まれます。体制が変わったロシアで、旧ソ連時代からの技術の推移も含めどのような技術が開花するか興味深いところですね。ロシア技術に関心の高い懇話会の皆さんとともに見守っていきましょう。



本懇話会関係で慶事が続いております。常に「うしとら」を応援してきてくださったクズネツォフ先生には、心から 70 歳のお祝いを申し上げます。プーチン大統領からの祝電は、本懇話会も栄誉と致すところです。また、本号編集集中にも西澤潤一本懇話会会長の名を冠した「西澤メダル」が米国電気電子学会に創設されました。次号には詳報したいと思います。(成澤 勝)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニュースレター) 第 14 号 2002 年 8 月 5 日発行  
発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニュースレター編集委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター 気付  
PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010  
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp